Nepal Blind Support Association

ネパールの視覚障害者を支える会会報

第１６号 ２００６年１０月　ネパールの視覚障害者を支える会（NBSA）

NBSA HP ： http://at.sakura.ne.jp/~ilte/nbsa/

主内容：活動報告/ネパールの働く仲間/ネパールのニュース/ネパールよもやま話他/事務局だより

ネパールの視覚障がい者 2000 人に白杖寄贈プロジェクト続行中

昨年 11 月からスタートした白杖 2000 本の配布が軌道に乗っています。ネパールの地方の視覚障がい者の多くは、竹に白いペンキを塗り杖にして使っています。いま、ネパールの様々な地方で、日本、台湾そしてネパールのロータリークラブの多大な援助を受けて、アルミ製の白杖が配られるようになりました。写真は西ネパールのネパールガンジで行った、学校対抗「盲学生のクイズ大会」の出場者たち。初めて金属製の白杖を手にしてみんなうれしそう。

（写真撮影と本誌への掲載はモデルの許可を得ています）

活動報告

視覚障がい児童の親へのセミナー　ネパールガンジで開催

NBSA は小説などのカセットテープの貸し出しや、点字マガジンの発行など視覚障がい者の福祉向上プログラムのほかに、社会一般への啓発活動も行っています。視力に障がいのある児童の親への啓発は、NBSA が特に力を入れている事業のひとつで、本年度は 8 月 21 日ネパール西部のネパールガンジで行いました。学校の１部屋を借りて、床に座ってお互いの顔を見ながら勉強をするのです。教育の重要性や自立は、家族の理解がないと発展しません。親が健康なうちに自分の子どもの将来を考えるなど、問題意識を提起するセミナーです。そして最後に必ず親同士の連帯を呼びかけます。これが親の会の結成で、親同士が様々な問題や情報を共有し、助け合って生きていこうという趣旨です。セミナー会場で、ネパールガンジ近隣の５郡の中から数人のお父さんとお母さんが役員に選ばれて、とりあえず親の会が結成されました。今後ネパールガンジを中心に、父母が自主的に頑張ってほしいものです。

子どもの日にちなんだ「盲学生のクイズ大会」　2 か所で開催

恒例になった盲学生のクイズ大会、今年はネパールガンジとカトマンドゥで行いました。同等な教育を受ければ、目の不自由な子どもも同等な学力を持っていることを社会一般に呼びかけるこの催しも、今年で 4 回目を迎えました。ネパールガンジは上述の親の啓発セミナーと同日に行い、5 つの郡から２名ずつ選手が出場し、接戦の末スルケット郡のシカール学校が優勝。

カトマンドゥでは 9 月 14 日、盆地内４つの盲学級の選手、各 3 名で行いました。こちらはどんでん返しで、毎年ダントツで１位を独占していた名門校が 3 位に転落し、あまりかんばしくなかったナムナマチンドラ校が他を大きく引き離して１位。さらにビリを続けていたドリケルの学校が２位と奮闘しました。実は事前に問題をカセットテープに吹き込み、各学校に配っておきました。90 分テープ 4 本という長いテープだったのですが、ナムナマチンドラ校の先生は毎日何度もテープを聞かせたとのこと。教育者の熱意で、ここまで子どもは伸びるのか、と改めて敬服しました。これだから子どもの日クイズ大会はおもしろい。来年が楽しみ。

<u>クイズ大会裏話：</u>今年のクイズ大会、本当にハラハラさせられました。毎年 8 月 20 日がネパールの子どもの日と設定されていましたが、この日は皇后の誕生日を祝す意味もあったのです。5 月に政権が国王から国民に戻されて以来、皇室ゆかりの行事を祝わないことに決まったため、子どもの日がいきなり変更され、いつになるのか見当が付かない日々が続きスタッフ一同悶々としていました。最終的に 9 月 14 日に決まりましたが、来年はどうなることやら…。

ネパールの働く仲間　(TSDCBD)

シャシ・カラ・シン さんは、カトマンドゥ盆地、キルティプルで視覚障がい者を主に、聴力障害や身体に障がいのある人々も含めた専門の職業訓練センター(TSDCBD)を運営しています。本日はシンさんにお話をうかがいました。　（写真左上：作業生の作品－ゾウさんのお香立て）

私はこのセンターを 1991 年に視覚障がい者やその他の障がい者の就労と、権利の向上のために希望をもって始めました。ネパールでは、教育を受けていない視覚障がい者の就労が非常に難しい情況にあります。また、障がいをもたされた者は社会から隠されています。
わが国には、膨大な数の視覚障がい者がいます。悲しいことにそのほとんどが僻地に住み、平均以下の生活を送っています。今日においても、ほとんどの家族が障がいとは前世の悪行のため、神が下された罰だとさえ思っているのです。私は彼らの生活条件の向上のためには、まず教育が必要だと考えます。目の不自由な人が社会に立ち向かって行くのは、自力で学ばねばなりません。私たちのセンターは、視力に障がいを持った人々の個性に合わせた自立ができるよう、特別なトレーニングを提供しています。トレーニングの内容には、ローソク作り、粘土工房ワークショップ、音楽教育、編み物や織物などが含まれます。
私はこの分野にたずさわるようになってほぼ 35 年になります。この間私が実感したことは、視覚障がい者は私たちの誰よりも才能あふれる人々だ、ということです。実際に、彼らは集中力に長けていて、仕事に精力を傾けるので、何でもたやすく理解するのです。視覚障がい者は自分の障がいに対処する知恵など、固有の才能や感覚をもっている人々です。
＊＊＊正式名称：Technical and Skill Development Center for Blind and Disabled (TSDCBD)
Phone: 977-1-4330-178 Kirtipur, Nepal
このセンターの売店は可愛いものがいっぱい。お時間のある人はぜひ寄ってください。

ネパールのニュース　２００６年 9 月 20 日～10 月 20 日

<u>児童誘拐殺人事件：</u>ダサイン直前に痛ましい事件がふたつ起こった。ひとつはネパールでは大変珍しい児童誘拐殺人事件。12 歳の少年が身代金目当てに誘拐され、両親が犯人の要求に応ぜず殺害されたもの。少年の身体はバラバラにされ、カトマンドゥ市内を流れるバグマティの岸辺に捨てられていた。犯人はインド人で拘留中。共犯と見られるネパール人女性ふたりは容疑を否定している。（身代金の額ははっきり公表されなかったが、300～400 万円ほど）

<u>ヘリコプター墜落事故：</u>森林自然保護省のトップを乗せたヘリコプターが東ネパールのタプレジュン郡で墜落。視察団の外国人 2 名を含む 24 名全員が死亡した。ネパールの著名な民俗学者のハルカ・グルン博士も犠牲になり、BBC ニュースでも報道された。上記ふたつの事件は 9 月 20 日以降、時をほぼ同じくして起こったもの。政情、社会不安がつのる中、何かの政治的陰謀が絡んでいるのではないか、とダサインの準備に燃えていた庶民に暗い影を落とした。

<u>ネパールの政変その後：</u>4 月の動乱以降、ネパールではマオイスト派の包括を目指した暫定政府を発足させたが、王制の在り方や武装解除に関して、双方の見解の相違が益々顕在化するようになった。9 月初旬に和平交渉が計画されたがダサイン祭後に延長された。しかし、祭り後の 10 月 8 日から数度に渉った会議も最終合意に至らず、和平交渉の決裂も予想される。この間、多種多様の組織が都市部で発足し、政府に対し人権、就労、生活改善などの諸権利を求める抗議行動が連日行われ、ネパールの政治的情勢はさらに複雑になると思われる。

ネパールよもやま話　1）ネパールにもあるんです　アユルベーター美容法

ネパールの化粧品市場を占めるのはダントツでインド製品。まずテレビの宣伝がすさまじい。その中でも特にすごいのはシャンプーのCMで、朝から晩まで綺麗な黒髪美女が登場。シャンプーで洗髪するのがネパール人女性のあこがれ。村にはシャンプーなど売ってないが、TVの電波はしっかり届く。次にフェイシャルクリーム。もっとも人気が高いのは「フェア＆ラブリー」で、このクリームを買ってくれる男と結婚したい、という村娘がいるほど。美白効果があるというので野次馬根性で買ってみたが、なんということはない、得体の知れぬ白い粉が入っているだけ。一瞬白くなったような気がして喜んだが、顔を洗うともとのしみがバッチリ浮き出てがっかり。他にP&Gやニベヤなどヨーロッパ・パテントの製品もあるけど、もとより売値が安いせいか、日本にあるような高級原料は使われていない。伸びが悪くてベタベタ。★★★男性化粧品も頑張ってきた！とくに整髪関係に力を入れているようで、ヘヤークリーム、ローション、フケ押さえシャンプーなどもあるが、いずれにしろベタベタ。夏場は直射日光が強いので、キラキラ輝いているほど。フェイシャルで話題を呼んだ製品は「ハーイ・ハンサム」。これも上記の美白クリームタイプで、浅黒いおにいちゃんがこれをつけると、周りに女の子がどっと押し寄せるというくさい演出のCMが一時毎日TVで流れた。ネパールの男性は美白にあまり興味がないのか、浅黒にプライドがあるのか「ハーイ・ハンサム」はいつしかTV画面から消えていった。国産で天然材料を使っているものもある。大量生産していないのかネパールでは高級化粧品に属し、値段も700円位とネパールでは抜群に高い。その名も「BIOTIQUE」。能書きを読むと、様々なバイオとアユルベーターの力が満載されている。商品をひとつひとつ紹介できないが、原材料は西洋料理の香料も多く、効能はそのそれぞれの原材料に由来しているそう。自宅で作れるかも。アユルベーターとは古インドの伝承医学のことで、天然薬用植物を使った軟膏や化粧品などが日本では紹介されている。

フェイスクレンザー

１．パイナップルジェル：香辛料のグローブ、ニームの葉配合(美白、汚染物質などの殺菌）
２．ハニージェル：キナ皮、アルジュン茶、天然うこん配合（肌のきめを整える）
３．メギの木ローション：赤ビャクダン、アーモンドオイルなど配合（洗浄効果）
４．アーモンドオイル・クレンザー：ひまわり、サフラン、ゴマ、ニーム配合（化粧落とし）

フェイスリフレッシャー

１．ハニーウォーター：アロエ、ニンジン、赤ビャクダン配合（肌のきめを整える）
２．キューリウォーター：コリアンダー、ペパーミント配合（保湿と毛穴引き締め）

栄養クリーム

１．モーニング・ネクター：蜂蜜、小麦、ゴマ配合（肌をすべすべに）
２．サフラン・デュー：アーモンド、ピスターチオ、天然ウコン配合（栄養と肌の活性化）
３．小麦ナイトクリーム：人参、ひまわり、アーモンド、天然ビタミンBとE配合（栄養補給）
４．マッサージクリーム：カリン種子、ビタミンEと天然ミネラル配合（乾燥の手入れに）
５．★最高級タンポポローション：ビタミンA＆E、各種微小ミネラル配合（活性化としわ予防）

フェイスパック

１．ミルク・プロテインパック：アーモンド、蜂蜜、小麦配合（保湿作用と栄養）
２．泥パック：ミネラル塩、バジル、ラベンダー、ペパーミント配合（若さを保つ。ホンマか？）
３．ピスターチオパック：大昔の女王愛用秘宝パック。アーモンド、レンズマメ、サフラン配合。
４．にきび予防パック：チョウジ、天然うこん配合（シミの予防にもよいそうです）

●その他に１週間パパイヤで皮膚の老廃物を除去し、クルミのビタミンで肌を磨き上げるなど、若返り美容も試したけど効果が持続しなかった。やっぱり運動するなど体全体から若さを維持しないとダメなよう。それから、天然植物パワーがちょっと強烈すぎるせいか目にしみることがある。肌の弱い人にはお奨めできません。また、容器が貧弱なのでキャップなどが時々はずれる。たまにはこういうワイルドなのもいいか、と思える人だけにお奨め。お求めはカトマンドゥ市内の有名スーパーや外国人の多い繁華街のタメルで。

2）ラマ教の葬儀

昨年、ネパールのヒンドゥー教徒ブラーフマンの葬儀について書きましたが、今回はラマ教の葬儀を紹介します。ヒンドゥー教はあまりに歴史が古いせいか、儀式が形骸化されていく傾向があり、本来の意味を知っている人は少ないようです。ラマ教の儀式は非常に精神面を重視し、誰にでもわかりやすく、また遺族に苦痛を負わさない考慮がなされているのが大きな違い。ネパールではラマ教徒はほんの５％位ですが、シェルパ、グルン、タマン、さらに自然宗教を信じる先住民族のタカリ、ライやマガール族の間にも広がり、版図は大変広いものです。ラマ教とはチベット仏教のことですが、日本の仏教とはちょっと違う感じです。最近没後３週間目の供養を拝見させていただき、ラマ僧に色々お話を聞きました。

まず驚いたのは、だれも喪服を着ていないこと。日常と変らない服装で、赤のサリーの女性もいた。白を着ると死者が悲しむからとのこと。机に白い布を掛けただけの簡素な仏壇の様なものに、死者が生前好きだった食べ物のほか、果物や菓子などがふんだんに盛ってあるが、花がない。花を切って死者に捧げると、殺生の罪を死者がかぶってしまう。死者には来世があるので、別れ際はめそめそしてはいけない、とのことで誰もが明るい表情をしていた。カトマンドゥに住むラマ教徒は、スワヤンブナートで火葬される。ヒンドゥー教徒のように、死後時を移さずに火葬せず 2－3 日間をおき、マントラ（真言）を十分に唱えてもらった後で荼毘（だび）に臥す。

死後 7 日目：初七日の大祭。チベット仏教の高僧ラマを呼び盛大に行われる。室内にいくつもの灯明をあげる。経済力により灯明の数が異なるが、最低 108 個は必要。灯油はヒマラヤ牛のラードのようなものがよいが、食用油でもよい。死者は暗黒に置かれ 7 日目に魂が目覚める。そして、周囲の様子や下界の家族を見て自分の死を悟る。その間見送る側は死者の好物を仏壇に捧げる。また、ラマ教徒は人が死んでも断食は許されない。ハラをすかしている状態は、死者を悲しませることになると。死者自身も空腹を感じるようになる。

死後 21,22,28 日目の間に家族はまた供養をする。日取りはグル（導師）がマントラを見て決める。この日家族は死者の魂に別れを告げなければならない。この供養は死者の旅立ちを見送るためのものである。

死後 49 日目に死者の行く道が決まる。それは天国もしくは地獄である。グルが死者の家庭を訪れ、593 ページの経を読む。死者の座を有利にするためである。よい行いをした者は神の世界へ行く。この世界とは英語のヘブンより大きく、ユニバースとも違う。我々とは別の世界の巨大な空間、大宇宙を意味する。この日死者に食事を切らさないようにする。初め仏壇に食べ物を供え、家族や訪問者がそれを食べる。死者は 49 日以降は神の世界へ行くので、食物は不要になる。この日ラマ教徒は最高の供養を行い、どんな来客にも食事を振舞う。断食は自分自身を傷つけるので体が弱る。ラマ教の教えは do not kill yourself である。そこで教徒は、自分の魂自身を喜ばせてから死者に祈る。

注釈）ラマ僧とはチベット仏教の高僧であるが、現在ではチベット仏教僧一般に対する敬称になっている。私が話を聞いた修行中のラマ僧は他の仕事もしているとのことで、頭も剃っていませんでした。

シュレスさんは兵庫県に 5 年間留学した経験を持つ男性です。 読者の中に、日本で鍼灸･マッサージを学んだネパールの盲学生はどうしたのだろうか、と気にかけている方がいらっしゃいます。ネパールにはもとよりマッサージがなく、その効能を知っている人はわずか。さらに社会的な職業差別などが原因で、残念ながら鍼灸マッサージで身をたてた留学生はひとりもいません。シュレスさんも自宅で診療を試みましたがさっぱり商売になりませんでした。その後ネパール盲人協会の役員などをしていましたが、幼いひとり娘の将来を考えて転職に至ったのです。職種は盲学級の教師。ネパール南部の田舎町カピルバストゥーで中学生に点字を教えています。この学校は盲児の教育に力を入れている統合教育校で、1800 人の生徒の中に 20 名の盲児がいます。バクタプルの街中で生まれ育ったシュレスさんが何より困っているのは、必要な生活物資が容易に手に入らないこと。それとインドの国境付近 (Mades) に住む様々な民族は、それぞれ独特の言語や生活スタイルをもっているので、理解し合うのがとても難しいことです。言語上の問題は徐々に解消されるでしょうが、教育に関する考え方がシュレスさんの学業経験とあまりにかけ離れているのが、何より辛いそうです。シュレスさんが言うには、国境付近の諸民族の中には、子どもをたくさん産んでも母親が「育てる」という自覚さえない。早い話が原始的な生活を送っているので、衣食住にさえあまり関心を払わない。そこで教育の義務など言っても到底理解できないそうです。学校へ行かせれば親は金がもらえるのか、と聞かれたこともあったそうです。この金とは学費のことではありません。インドがこの学校を設立し、いまも援助を続けているほか、ネパール政府も盲学童に毎月 1000 ルピー、日本円で約 1800 円程度の学費と、寮のふとんなどの物資を支給していることを、何人かの親がはき違えたようだとシュレスさんは言っていました。給電の状態を尋ねてみましたら、インドから電気が供給されるのでカトマンドゥより停電が少ないとのこと。 また、南ネパールには米がふんだんにあるが、青菜を食べる習慣が定着していず入手が困難で、毎日玉ネギ、イモ、マメばかりの食卓に、いいかげん飽きてきたようです。最後にシュレスさんは「私は日本の留学を終えてネパールに帰国してから、盲人団体での活動ばかりしてきました。 しかし今後は家族のためにもっと地に足の付いた人生を送る時期に入った、と感じています 」 と語った。

事務局だより

● お蔭様でダビング機を購入できました

NBSA ネットニュース 9 月号で「●募金のお願い」を掲載しましたところ、購入希望の高速カセットテープダビング機の購入価格をわずかに不足するも多額の寄付金が集まり、NBSA 予算から不足分を支出することで予定通り購入できました。11 月中旬にはカトマンドゥへ搬入できることになりました。ご協力ありがとうございました。

● NBSA2006 年秋のスタディーツアーは、参加応募者が最少実行可能人数に満たなかったため、中止させていただきました。

Nepal Blind Support Association (NBSA)
Yoriko Atsumi P.O.Box: 8974 PCN-111 Kathmandu, Nepal
Tel:977-1-4425-709 E-mail: yorikonepal@hotmail.com

《日本の事務局》
〒890-0064 鹿児島市鴨池新町 27-1-1108 上田佳代子
Tel＆Fax： 099-258-6685 E-mail：ilte@at.sakura.ne.jp
NBSA HP ： http://at.sakura.ne.jp/~ilte/nbsa/

維持会費：個人会員年間 6,000 円 / 法人会員年間 15,000 円

振込先 ：郵便振替 01790-7-74222（ネパールの視覚障害者を支える会）